

表現の起源 『論理学研究』 第一研究と自閉症の一事例

村上 靖彦

(日本大学 yasuhiko_murakami@hotmail.com)

表現と身体運動感覚

「授業が全部終わり、面接室(教員室の隣の広い部屋で皆のたまり場みたいになっていた。)でくつろいでいた。日直の先生が電話の前で座っていたところに生徒が質問しに来た。「M先生、～は～でいいでしょうか?」と棒読みみたいな言い方をした。先生は質問に答え、彼は「ありがとうございました。」と言い、戻ろうとした。だがまた振り返り、同じ質問をした。これを三回繰り返し戻っていった。私はこのやりとりを見てびっくりした。家で私は同じことを三回必ず聞いていたのだ。そのたびに次姉に怒られていたのである。一回目は音がする。二回目は声がする。三回目で何を言っているのかがわかる。私は何とか二回目でやめ、三回目は頭のなかで言うことでわかるようにした。」(宮尾先生の患者さんの手記、24頁より)

『論理学研究』第一研究でフッサールは、動機付けに基づく経験的な指示作用である指標 *Anzeichen* からは区別された、理念的な表現 *Ausdruck* の構造を三層の構造として呈示している。1) 私たちは語音すなわち語られた言葉を生き(体験し) *erleben*、2) 論理的・イデア的な意味の中に生き、同時に3) 対象を志向する¹。表現においてはこの三つが同時に作動する。本稿ではこの図式の最初の二つの項に特に注目する。言い換えると、イデア性としての表現(11節以降)ではなく、体験としての表現(10節まで)に注目する。音響現象や視覚的形象としての語音 *Wortlaut* は、語ったり書いたりする主体の関心を引かない。言語行為においてはこのような感覚的印象は意識の背景に退く。声を聞きながら、人間は音響現象ではなく語や文の意味を理解しているのである。意識の前景は意味が占める。これが、人間は物理現象としての語られた言葉を生きつつ、意味の中を生きているという図式の意味である。この構造はフッサールによって知覚の構造へと拡大されることからわかるとおりに²、志向性の持つ意味付与のアプリオリな構造そのもの

¹ 「[...] しかし我々が語の表象を体験しているあいだは、我々は決して語を表象することの中に生きているわけではなく、もっぱら語の意味ないし意義の中に生きている([...] aber während wir die Wortvorstellung erleben, leben wir doch ganz und gar nicht im Vorstellen des Wortes, sondern ausschließlich im Vollziehen seines Sinnes, seines Bedeuten.)。従って我々がそうしているあいだは、すなわち意味志向の成就と、場合によっては志向の充実に没頭しているあいだは、我々の全関心は、<意味志向によって志向され、意味志向によって名指された対象>に向けられている。」(LUII/1, 39-40; cf. S.32, S.66)

² この構造は、意味論が知覚へと拡大されるのにもなって、感覚的所与と意味の二重性として

と考えられてきた(Murakami 2001)。

しかしながら言葉を理解するために、「一回目は音がする。二回目は声ができる。三回目は何を言っているのかわかる。」という三段階の過程を経るような自閉症の人たちの経験の構造はいかなるものであろうか。この問いが本稿のライト・モチーフとなる。

ところで『論研』第一研究の第8節でフッサールは、言語表現の本質を身体性から切り離された論理とアイデアの世界における意味に求めた。つまり表現(すなわち彼にとっての思考)の領域を感性から切り離された理念性の世界においた。表情や身振りといった、括弧付きの「表現」、表出 Äußerungen は伝達の意図を持たず、真の意味では意味を持たない(LUII/1, 31)。その根拠は第一に、(充実される必要がないことからわかるとおり)意味が本質的にアイデア的なものであるということにある。次に語の発音つまり語音が知覚野に現実化してもいいし(話したり書いたりする場合)、(内言のように)頭のなかで空想するだけでも良い、さらには充実されない空虚な空想でよいということにあった(LUII/1, 36)。記号と意味はそれが現象する感性的な存在領域とは無関係に、理念的に形成され作動するものなのである。

しかし、記号をアイデアの世界に還元するフッサールの議論は再検討を要する。実は記号が現出する領域の多様さと、現出領域と無関係に作動することそのものは表現の理念性を保証するわけではない。むしろこの多様さは、意味をアイデアの世界だけへと還元しようとする『論理学研究』でのフッサールの意図を裏切る意味を持つ。たとえ語音の分節と意味の分節そのものは理念的なものであるにせよ、語音を含む言語現象全体は理念性の領域の中だけで自足して現象することはできない。つまり語音は空想にしる知覚にしる直観領域、さらに正確に言うところでは直観ではなく身体運動感覚に関わる。頭の中で考えるときも、たとえばファンタスマ(空想においてヒュレーにあたるもの)としての声になかったとしてもつまり空想像 Phantasiebild が空虚表象だったとしても、運動感覚の方は空想的に充実して作動している³。空想身体 Phantasieleib が作動しているのだ。いかに自己流であろうとも自分で発音しえないような言語記号を用いて思考することはできない。つまり思考は(音声言語でも手話でも)語るあるいは聞く身体活動としてしか作動しないのである。記号そのものは文法的言語学的に見れば、理念性の次元で作動するものであるが、それが語音として実際に作動する以上身体運動感覚の作動と常に二重化されざるをえないのである。

つまり、語音とは感性的形象の次元、運動感覚の次元、そして言語の理念的分節という互いに異質な三次元が次元浸透⁴しあいつつ互いに分節する現象なのである。理念性・論理は、運動感覚と質的に異なる還元不能な次元であるが、運動感覚と浸透することでのみフッサールの意味での表現として現象する。三回同じ言葉を聞かないと理解で

知覚的志向性全般の構造を支えることになるが、この拡大は『論理学研究』第五研究(LUII/1, 385)、『イデー1』や『イデー2』(Ideen II, 236-237)で観察できる。

³ 生理学的にも口角の筋電位が活性化することが知られている。このことは、空想身体における運動感覚の作動を間接的に証示していると考えられる。

⁴ 浸透 Durchdringung は、『論理学研究』第三研究に由来する言葉である(LUII/1, 227, etc.)。

きないという冒頭の引用が示しているのは、形象の統覚(知覚における受動的能動的総合)、運動感覚、言語的分節、この三つの次元を順番に統合させていく過程である。定型発達者においてはそのつとすでに浸透・統合して作動する三次元の現象が、自閉症者においては時にばらばらに作動するのである。

この浸透と分節の構造をもう少し詳しく見てみる。引用した自閉症者によると「一回目は音がする。二回目は声がある。三回目は何を言っているのかわかる」。一回目では感性的印象が受動的に分節されている。把持と予持を伴って音響の形象化が起こっている。二回目では、音響という感性的形象が(空想身体において看取された)運動感覚と浸透することで声であるとわかる。つまり単なる物音と、人間の声とが分化する。物音と声を分化するのはそれを身体運動感覚と浸透した感性的印象として統覚することによる。声が声として聞こえてしまうのは、単に特異な形象として地から図が浮き出すからではなく、それが人間(あるいは動物)の発声の運動として聞こえるからである(つまり声が聴覚野のなかで図となって際だつためにも運動感覚の統覚が必要である)⁵。このことは発声の場面において、声が常に自分の運動感覚と浸透していることに由来するが、声を聞くときにも、発声の運動感覚が空想身体において作動しているのである(これは他者の運動感覚を潜在的に感じている空想身体による)。あるいは運動感覚が作動したときのみ、ある音が声として聞こえることになる。このとき、感性的な印象の形象化=分節は、運動感覚と浸透しあいつつ声として分節してゆくことになる。二次元の浸透と声の分節=形象化は相補的な関係にある。このように運動感覚というそれ自体は直観化できない現象が直観的な形象化のなかへ組織化する事で体験可能なものに次元転換⁶される働きを図式化⁷と呼ぶことにする⁸。自閉症者は自らの運動感覚を体験化でき

⁵ 同じことは、書き言葉にも当てはまる。視覚的形象に運動感覚や理念性と浸透した形象であるがゆえに、字は図として浮き上がり、(理念性の浸透ゆえ)絵とも区別される。次元浸透の弱い自閉症者は、文字を意味を持つ語音としてではなく、模様として捉える。二次的に他の事物を指示する指標となるのである(表現ではない)。学習障害の一種である識字障害でも別様の仕方ではあるが、この浸透に問題が起こっていると思われる。識字障害の子どもの描画から推測できることは、おそらく彼らが輪郭・線ではなく色調の変化・固まりつまり面として視覚野を分節しているために、線からなる時の際だたせに困難があるということである。

⁶ 次元転換とは、次元間浸透によって複数の次元が統合・変質することによって生まれる、次元複合構造への変質である。基づけによって、基づけるものと基づけられるものが浸透・統合し、基づけるものの側が変質を被ることである。いまの例の場合、体験されない盲目の運動感覚が、声を分節する運動感覚へと体験化しつつ次元転換する。

⁷ 本来カントの図式論は感性とは無縁の概念が感性的形象を通して現象することを指していたが、ここでは概念に限らず知覚以外の次元の現象が、空想も含む感性的形象の次元と浸透し合うことで、感性そのものも形象化するとともに、その異次元も分節するという、相互分節の働きを意味することと定義する。このとき運動感覚や情動性といったそれ自体では体験化できない・形象化できない現象が、体験化・形象化できる形式に変質(次元転換)する。『論理学研究』第三研究でのフッサールはこの事象を指して、(認識のみを問題していたものの)異種の要素の浸透の結果を統一契機 Einheitsmomente あるいは形態的契機 figural Momente と呼んだ(LUII/1, 234, 281)。

⁸ そして運動感覚や情動性には(微小だからという理由ではなく)体験できない部分・場合がある。経験的には、肩がこっているのに感じない人は多い(直す過程で感じるようになる)。あるいは自分の四肢のつながりや寒暖を感じない場合もある。不器用も運動感覚の組織化・体験化が粗雑で

ない場合もしばしばあり、仮に体験したとしても感性的印象と両立しないこともある。例えばウィリアムズの場合、感覚か身体運動かどちらかだけ片方だけしか体験できないのである(Williams 1998, 56)。このような場合、声を声として聞くのは難しくなる。事実多くの自閉症者は周囲の音から声を選択的に聞き取ることを苦手とする。声として聞く場合は音響と運動感覚は決して分離しないから、運動感覚を感じ取れないと本来の意味では声として聞こえない。声においてあえて感性的印象と運動感覚を分離するのは定型発達者にとっては二次的な抽象である。つまり声が声として看取されるときには、つまり物音から声が分化するときには、感性的印象と運動感覚が互いに分節しあうが、同時に両者は分離し得ないものとして統合するのである。別の見方をすると、自閉症児が物音と声を分節できるようになったときに、彼は運動感覚という「見えないもの」、感性的には与えられていないものの次元、新しい現象の次元に開かれたと言える⁹。身体運動の次元が開かれるとは、他者身体の運動感覚へも開かれるということである。自閉症者はここで自己の身体 Leib と他者の身体も発見することになる(ただし両者はまだ区別されていないかもしれない)。人の呼び声に反応しない重度の自閉症児にはまだこの次元は開かれていない。彼には自己も他者もなく、感覚の移ろいだけがある。つまり運動感覚と感性的印象の相補的分節・統合とは、他者の統覚と相補的な問題であり、つまり間身体性と地平を共有する問題である。

さて声を聞く二回目から、言葉を聞く三回目への展開は何を意味しているのだろうか。言語的な意味がここで把握されることになる。ということは、身体感覚に支えられた聴覚的形象(声)が言語の次元と浸透し合うのである。こうして初めて、声は語音となる。と同時に、これは理念性の次元という新たな見えないものの次元への参入の経験でもある。フッサー自身、音声それぞれ自体としては「空虚な語音」(LUII/1, 37, 41)つまり理念性や文法が浸透していない音であり、それが表現の語音となるとときに或る「現象的変容 phänomenale Modifikation」(LUII/1, 41)を被ると言っている。つまり異なる次元と浸透した現象は、次元転換によってその性格そのものを変容する。声が言語的音声へと次元転換を起こすのである¹⁰。そして自閉症者の証言を間接的な証拠として採用するならば、

あると言える。

⁹ この過程は、自閉症者においてはしばしば意識的な作用であり、定型発達者のように自動的に成立するものではない。自閉症者であるニキ・リンコの言葉を借りると、オートマでは動かずにマニュアル操作が必要なのである(Niki&Fujiie 2004, 33)。この次元開示は対人触発を前提とする(Murakami 2006d)。

¹⁰ このように、相互に文字通り異質で還元不能な次元が発見され、同時に複数の次元が浸透し合うことでお互いを分節する。それぞれを単独で取り出してしまうのは恣意的な抽象あるいは自閉症のような発達障害である。この意味で、現象学的な発生とは、異質な次元の発見とそこへの参入、それと同時に生起する相互浸透による諸次元の相互分節と統合という出来事であると定義できる。このとき古くからある次元に基づけられて新たな次元が作動するが、二つの次元そのものは異質であるから類似点はない。つまり新たな次元の獲得としての発生的創設・基づけは連続的な過程ではなく切断である。しかも新たな次元が発見されることで基づける次元も分節し直されて変質する(Merleau-Ponty 1942, 143-144)。自閉症者の例は、定型発達者の場合は一見アプリアリに成立しているかのように見える現象学的な発生構造を、経験的な発達の構造として現実化しているのである。現象学的には発生構造を持っていても、経験的・心理学的には生得的な能力である場合、つまり発生と発達は一貫しない場合もあるのだ。これは通常の表現とは別様の言語的理念性の発生構造・現象形態もあり得るということでもある。人間の経験の可能的な構造・地平は、

対人関係は少なくとも運動感覚における交流の次元と、言語の次元における交流とのあいだで区別できて、後者は前者に基づけられているということがわかる。さらにいえば他者とコミュニケーションが取れないにも関わらず言語の用法は身につけている自閉症児が少なからず存在することを考えると、運動感覚の次元の対人交流に基づけられない限り、言語は定型発達の意味でのコミュニケーションとはなりえない、つまり理念性の伝達は、それに基づける運動感覚の次元に関係するのであり、理念性そのものの中にあるわけではない。

自閉症において、もう一つ別の例を挙げよう。多くの自閉症者の思考は視覚優位であり、かつ言語習得は会話を通してではなく、書き言葉それも活字の形象の暗記と模倣からいることが知られている。1)視覚優位とはつまり、頭のなかでビデオを上映するようにイメージを連鎖させることで、言語的な思考の代用をしている¹¹。「孤独な心的生」(LUIII/1)においてすら成立する純粹な表現作用、つまり語音の空虚表象を用いた定型発達者の意味作用とは異なる思考方法である。定型発達者の思考はイメージ(意味の直観的充実)を必要としない。語音の空虚な作動があれば意味志向は作動する。しかし何人かの自閉症者は、言語の作動を必要としない代わりに、イメージの頭のなかでの上映を用いるのである。表現を使わないで思考するのである。つまり表現はア priori に思考であるわけではないのだ。この場合、自閉症者にとってはイメージの連鎖こそが思考であって、語音は副次的である。自閉症者の思考の「跳躍」は多くの場合、イメージ記憶の部分部分の共通性に基づく連鎖・連合に依っている。ここでは表現のもつ語音・意味志向・対象の三項構造は、想像のもつファンタスマ・像客体 Bildobjekt・像主体 Bildsujet の三項構造に置き換わっているかもしれないが、表現の意味志向を支配している文法構造と語彙の布置に取って代わって、受動的総合の連合が「文法」となっている。正確にいうと運動感覚と論理が結びついた表現 Ausdruck 構造ではなく、イメージと論理が浸透した現象を思考の手段としているのである。つまり言語を使用する人の論理とは異なるが、やはりなにかの論理に従って思考している自閉症者の思考は、支離滅裂なわけではない。しかしながら定型発達者と自閉症者のあいだの会話は、両者の論理が異なる発生構造で図式化しているためにかみ合わない部分を残すことになる。2)書き言葉から言語を習得する自閉症児は、語の形象をまずデザインとして記憶し、次にそれに個別の対象知覚を結びつける¹²。つまり、火星の模様を火星人の存在と結びつける場合と同じよう

現に与えられている構造、内省で記述可能な構造より広いのであり、精神疾患や発達障害は、このような「外部」をかいま見させてくれるのである。

¹¹ 「絵で考えるのが私のやり方である。言葉は私にとって第二言語のようなものなので、私は話し言葉や文字を、音声付きのカラー映画に翻訳して、ビデオを見るように、その内容を頭のなかで追っていく。誰かに話しかけられると、その言葉は即座に絵に変化する。」(Grandin 1995, trans., 20)

「私は機器のシミュレーションを頭の中で行ったり、操作上の問題を解決しようとするとき、どんな角度からも見え、自分自身を機器の上にも下にも置くことができ、同時にその周囲を回転することもできる。三次元のシミュレーションを作る高価なグラフィック・プログラムは、私には必要ではない。自分の頭の中に、何よりも行動にすばやくできる技術があるのだから。」(Grandin 1995, trans., 22)

¹² 一部の自閉症者は、語が一般者ではなく個物を指示するとみなす。つまり指標的な動機付け連関である。「多くの人と違って、私の思考はビデオのように具体的映像から、一般化や概念化へ向

に(LUII/1, 24)、一次的には理念的な表現ではなく、指標として言語を獲得するのである¹³。このとき、言語は、発話の運動感覚に浸透したものとしては創設されない。たとえば語の発音を覚えても、それは音響の形象と、それが指示する個別対象との関係のあいだに、事後的・経験的な動機付け連関をうち立てることによるのであって、語音の運動感覚と理念的意味が次元間浸透しつつ図式化するという構造は持たない。このような習得をした場合、言語の理念性や文法の論理的な法則性は、語音の身体性とは独立したものとして、象徴文字を解読するように解読され、まさに独立した言語の世界として成立した上で、事後的に動機付け連関によって指示されることになる。つまり運動感覚ではなく、感性的形象との浸透が優先される。運動感覚に浸透しないので棒読みになりやすい。さらに動機付け連関の延長線上で言語が獲得された場合、理念性も定型発達者とは異なる構造(図式化)をする可能性がある。上述の通り、自閉症者にとって語の指示する対象は個別対象であって、類概念ではない。類とは異なるなんらかの仕方でも言語が構造化されるのである¹⁴。

表現と情動性

身体運動感覚の関与はさらに新たな次元の関与を含意する。すでにフッサーが「広い意味」を構成する心的作用として感情を取り上げていた(LUII/1, 33)ことから暗示されるとおり、ここで情動性の次元が関与してくることになる¹⁵。運動感覚の分節は、同時に情動性の感情表現へと分節する運動でもある。語音の作動が運動感覚を前提とする以上、そこに浸透する情動性も関わってくる。これまでのところで、運動感覚と語音の次元間浸透の構造が明らかになったが、次に明らかになることは語音と理念的意味の浸透が、運動感覚と情動性の要素間浸透と相互分節に基づけられているということである。定型発達者においては、語音を発する身体運動感覚が情動性の現象と多かれ少なかれ密接に連動するために(Murakami 2006e)、身体運動感覚とともに語音が現象するのとあわせて、言語的な意味に情動性が浸透するのである(理念的意味が情動性に由来すると言っ

かう。例えば私の「犬」という概念は、今までに出会ってきた犬それぞれに密着している。(…)例えば「グレートデン種の犬」というような抽象化されたものではなく、知人がかっていたグレートデン犬で、それぞれに名前を持った犬なのである。」(Grandin 1995, trans., 29-30)

¹³ 自閉症児や一部の学習障害の言語療法でこの仕組みを積極的に使う方法が成果を上げている。

¹⁴ ただし注意しなければいけないことがある。ここで表現の作動に不可欠な下層として作動する指標作用は、自閉症者が用いる動機付け連関による指標作用ではない。フッサーが指標作用と名付けた現象には二種類ある。火星の運河が宇宙人の存在を指示する指標である(LUII/1, 24)、という二つの独立した存在者のあいだの経験的な動機付け連関と、感性的印象と身体運動感覚の浸透やこれから問題にする身体運動感覚と情動性の浸透とはことなる構造の現象である。前者を自閉症者は用い、後者は定型発達者にとっては語音の構成要素となる。後者すなわち浸透は経験的で偶然的な動機付け連関ではなく、アプリアリな基づけ関係を持つ(しかし自閉症者ではしばしばフッサーにとっての「アプリアリ」がアプリアリには成立していない)。

¹⁵ あらかじめ用語法を定義する。情動性はそれ自体は知覚されないだけでなく体験しえない「次元」を表す名として使う。これが知覚・認識の次元と浸透したときに感情志向として統覚される。また運動感覚と浸透することで分節された状態は感情表現と名付ける。このような浸透・分節に失敗して孤立・固着したときには、情動というかたちで化石化する。

ているのではなく、むしろあらゆる基づけは異質な次元同士の浸透である、ということを示している)。記号と意味の二重性、浸透は記号を発する運動感覚の分節と情動性の運動の相互浸透に基づけられている。それゆえ情動性に当てはまらない言葉は違和感・わざとらしさを残すし、嘘はばれることもあるのである。すべての言表が感情表現だと言っているのではないが、すべての言表・思考はその時の情動性によって浸透されており、情動性は言表において図式化している。こうして発話に対して情動的なニュアンスが張り付くことになる。逆に自閉症者の場合、言語は感情表現としては創設されず、純粹に知覚的認識に基づいている¹⁶。であるから、暗黙のうちに間主観的に了解しようと想定されている状況や感情に基づく、定型発達者の曖昧な言い回しや機微を捉えられずに悩むことになる。

表現とリズム リズムと間身体性

本論の分析に基づいて表現という概念を定義すると、運動感覚と情動性双方の感性的形象との浸透により成立した声に基づけられて、声と理念性が浸透することで *Bedeutung* としての意味が生じる運動となる。重要なのは、諸要素は分節するのにも関わらず統合されたものとして現象するという逆説である。ということはその現れにおいて分節と浸透を同時に示すような現象があることになる。これがリズムあるいはより適切には、(テンポ、抑揚・メロディー、和声 *harmonie*、響き *timbre*、リズムなどを含む広い意味での)「音楽性」である。1)音響の組織、2)運動感覚の秩序、3)情動性、4)理念性もリズムを通して分節する。ベルクソンは、リズムにおいて芸術作品が情動・質を表現すると述べている。芸術作品のリズムが持つ催眠効果・暗示効果によって¹⁷、鑑賞者はある感情を体験する、つまり擬似的に情動性を感情へと図式化するというのである¹⁸。リズムに乗るといふ働きが感情へと参入する窓となるのである。リズムとは現象の諸次元の浸透運動の痕跡、図式化の運動の直観可能な痕跡なのである。

1)リズムとはまずもって音や色などの形・運動の分節である限り、感性的形象の分節である。2)そして身体運動感覚は、リズムを通して図式化されている。自分以外の事象の運動に関してもリズムとして知覚される場合にのみ、それが身体の運動であると認識される¹⁹。3)同時に、このリズムを通して情動性も図式化されている²⁰。例えば、声にお

¹⁶ 「私にとっては、自分の感じたことを外に表すことは、頭で決めて意識的に行う行為だった。ちょうど、自分の内側から、感情や感覚を「手で」取り出して、それを何か、表に掲げられるような形式に変換するような感じだった。どうして人間はそんなことをすることになっているのか、それさえも良くわかっていなかった。私の感覚や感情は、ひとりでの外にでることがなかった。(…)私の感覚や感情が他人にわかるかわからないかが重要なことだとは、少しも知らなかった。」(Gerland 1997, trans., 109)

¹⁷ 「リズムの規則性は、リズムと私たち之间に一種のコミュニケーションを確立する。拍の周期的な回帰はそれを手段として私たちが想像上の操り人形に演じさせるような見えない糸のようなものである。」(Bergson 1889, 9)

¹⁸ 「芸術の目的は、私たちの人格の能動的あるいはむしろ抵抗の力を眠らせること、そして私たちに暗示を与える想念を私たちが現実化し、表現された感情と共感する完璧に従順な状態へともたらすことであるように思える。」(Bergson 1889, 11)

¹⁹ ベルクソンは、「肉体的共感 *sympathie physique*」(ibid., 10)と呼んでいる。

いて情動性が図式化されるのは、その高低、テンポ、強度、といった一連の変化であり、これらが広義のリズムつまり音楽性を構成しているのは言うまでもないだろう。つまり感性的形象も情動性も運動感覚もそれ自身はリズムではないが、リズムにおいて身体運動感覚と情動性は同時に図式化しているのであり、それゆえ体の姿勢・動きや表情は感情を反映してしまうのである。リズム・音楽性において情動性と運動感覚の浸透が成就する。4)これらに基づけられた段階として、言語、そして言語以外の芸術様式などにおけるリズムの働きがある。このリズムがなかったとしたら記号は情動的意味(ニュアンス)だけでなく理念的意味を惹起しないのである。たとえば棒読みが聞き取りづらいのはそれゆえにである(逆に、言語を運動感覚に基づけていない自閉症の人はしばしば棒読みのような話し方をする)。記号は身体運動感覚のリズム・イントネーションが浸透して初めて記号として成立し、意味を持つ。それゆえイントネーションの違いで疑問文になったり、通じなかったり、意味が変わる語すらある。身体運動感覚と情動性の要素間浸透に基づけられて、記号と意味志向の要素間浸透が作動している。この基づけ関係が次元間浸透、次元転換である。記号は常にリズムと強度を持ち、これは他者ないし自己の情動性や身体運動感覚を告知している。イメージを直観しなくても身体運動感覚が発音に伴う以上、情動性の方は常に直観化、正確には図式化による体験化が可能なのである(書き言葉を読む場合でも空想において直観化されうる)。感情の把握だけでなく、構文の持つ統語構造のカテゴリー的区分(述定、推量、疑問など)そのものが、リズムや抑揚によって表現されるのである。身体の質(リズムやイントネーション)と論理は次元間浸透しあっているのである。他の例を挙げると、外国語を読む場合に、会話のリズム・イントネーションに慣れていないときにはすらすらと意味が入ってこないし、複雑な構文を読みとれないのである。教科書を棒読みで音読している小学生は文章を理解していない。ここではそもそも意味志向が欠落している。文法や語彙の知識だけでなく、リズムへの慣れが理解力を左右する。つまり言語的な意味は身体性(形象、運動感覚、情動性の図式化)に基づけられて初めて作動する。このことは定型発達者においてイメージを必要としない思考、つまり空虚な意味志向による意味理解は実はこの情動性を図式化するリズムの体験によって媒介されているということを暗示している。意味志向の空虚表象においても言語を使用する限り、空想像は作動していなくても空想身体における運動感覚と情動性は作動しているのである。自閉症者の言語習得は、このように身体性に基づけられた発生構造を持たないまま、理念性を音声形象に指標的動機付け連関で結びつける仕組みである。それゆえ本稿冒頭の引用で、少年が棒読みしていることと、三回同じことを聞かないと理解できない、ということはリズムの欠如という点で相関関係にあるのである。

「しばしば私はつっけんどんに響くような言葉遣いで反応して、人の気を悪くさせた。自分の気持ちの中では、言いたいことがはっきりしていたのだが、言

²⁰ 「詩人においては、感情がイメージの形で展開し、イメージ自身がそれを翻訳するリズムに促った言葉で展開する」(ibid., 11)

葉が私の思いとマッチしたことがなかった。今は、他人の話し言葉のリズムについていけなかったことが、私の言葉を意識に反して無礼な響きにさせた原因の一つだったと理解している。」(Grandin 1986, trans., 113)

「言葉が私の思いとマッチしたことがなかった。」、つまり言語使用が情動性と運動感覚の次元に基づけられて創設されていない。そして自己における図式化の困難が「他人のリズム」に乗れないことと相関的であることが、引用では示されている。

リズムの持つもう一つの大きな特徴は、それが間主観的に無差別に共有されうるということである。リズムは発する側も受け取る側も、全く同じリズムを生きるのである。つまりリズムは情動性と運動感覚の、知覚的次元に支えられた図式化の様態であるだけでなく、間身体的な図式化でもある。それゆえリズムという切り口を使うことで、ベルクソンは鑑賞者の視点から、作者の感情の暗示つまり情動性の図式化の共有を、論じることができたのだ。木村敏もあいだあるいはメタノエシスという概念でこの現象をねらっている(Kimura 1988)。このリズムの共有、リズムにおける自己と他者の無差別性こそが、間主観性における空想身体の作動の現象学的証拠である。これは語音が、現実の運動感覚でも空想身体でも同じ機能を果たすという事実と平行関係にある (Richir 2000, 353)。リズムこそが、声の次元において間主観性を支えているのであるから、リズムがつかめないとうまく他者と意志の疎通が行えない。つまりリズムは個人の情動性と運動感覚の図式化であるだけでなく、そもそも複数の人間のあいだで運動感覚と情動性の間合いを図式化するのである。生きる身体の図式化(分節と統合)はそもそも間身体的で間事実的なのである。これに基づけられないかぎり、言語はコミュニケーションの手段となりえない。それゆえ、書き言葉(正確には活字)の解読を通して言語を身につけた自閉症者にとって、言語は本質的にコミュニケーションの道具としては成立していない²¹。

主体と対象の創設と、表現の創設の同時性

冒頭で引用した自閉症者の言語使用から明らかになった構造は、1)形象の統握(感性的な受動的総合)、2)知覚への運動感覚と情動性の浸透(声の成立)、3)言語的理念性の浸透による語音の成立、という三段階の発生構造であった。この構造から、さらに主体と対

²¹ 「口で説明されても、私には話し言葉をうまくつかむことができなかった。普通の人が日本語を聞くときでも、中身が非常に専門的で高度な話だったり、音量が不安定で音が大きくなったり小さくなったりすると聞き取りにくく、まるで外国語のように聞こえたりするのではないだろうか。話し言葉がうまくつかめないというのは、そんな感覚に近い。言葉には違いないはずなのに、ときとして意味のない音の連なりのようにしか聞こえてこない状態だ。(…)本を相手にしている方がずっとよかった。印刷された言葉は常にそこにあって、不変で安定しているからだ。」(Izumi 2003, 46)

象の定立の発生を考えることができる。第二段階では、他者の生きる身体と自己の生きる身体の次元が発見されているが、自己と他者が、人格として定立されているわけではない。あくまで、自己身体 Leib については直接、他者身体については間接的に(つまり空想身体において)運動感覚と情動性の作動が図式化を通して感じられている状態である。間身体性が作動するリズムは無差別的なので身体性が感じられているだけで、(さまざまな社会制度・価値や言語の結節点であり、能作の主体である自然的な)人格(*Ideen II*, §50)としての自己と他者はまだそれとして定立されていない。生きる身体の「ここ」が感じられたとしてもそれは「私」の定立を保証しない。この間身体性の作動と、人格の定立のあいだには跳躍がある。同一性を持った人格の定立は「私」や「あなた」といった人称代名詞や固有名詞の使用と不可避的に結びついており、言語的あるいは理念的な次元において「定立」として成立するからである。つまり第三段階の発生が関与してくることが予想される。「ここ」から「私」への、「そこ」から「あなた」への次元転換がうまくいかないのが、自閉症者は人称代名詞の使い分けに困難を覚えることがある。前節までに記述してきた浸透と図式化の構造に加えて、人格の定立においては、生きる身体がその背後に想定される人格を指示するという構造が成立している。他者身体の図式化は感情移入の構造であるが人格の定立は像意識の構造(Hua XXIII, 19-20)と同レベルの発生段階である。本稿の意味での図式化における感情移入自体は定立・中立の問題圏には入らないが、人格の定立および像意識の中立変様の成立が同時に図式化の構造に浸透するのである。後者では音声は物理的側面、図式化された感情表現が像対象 Bildobjekt、人格が像主体 Bildsujet の対応物となって、像対象(イメージ)が像主体(モデル・指示対象)を指示するという構造と平行の構造が成立しているのである。つまり人格は言語的な思考がはじまるとともに「事後的に」定立されるものである。つまり1)身体の物理的側面、2)身体のリズムと3)人格の分節と定立は、言語の浸透において成立する1)語音、2)意味 Sinn と3)指示対象の分節と定立と相補的な関係にある。表現の構造としてフッサールが示した、語音、意味、対象の三分割に対応して、物としての身体、生きる身体のリズムにおける図式化(声、表情、など)、人格という三分割が創設される。ここで人格の位格に「私」、「あなた」あるいは固有名が創設される。語るという行為が、「わたし」、「あなた」として主体・人格を定立することになるのである。ここで初めて、自我が対象をねらうという志向的な構造が創設されることになるその意味で、表現の原創設と主体と対象の原創設は構造的に同時である。論理的・理念的表現の浸透とともに、間身体性から(定立された人格間の関係である)間主観性へと次元転換が起こるのである。ただし、定型発達者は生まれたときから間身体的な情動性と運動感覚の中を生きている上、生まれたときから語りかけられ続けているので潜在的には言語の次元の中に生きている。つまり間身体性と間主観性は同時に作動していてこのような発生構造は見えにくくなっていく。高機能自閉症者の一部が身につけるキャラクター・仮面としての自己はこのような情動性と運動感覚に基づいた発生構造を経っていない。感情の交流に基づいて自己を定立するのではなく、ある行為をするための外面的な模倣を行動パターンとして集積し、それを「自己」と見なすように見える。

結論

運動感覚と情動性の次元の発見、言語的な意味の次元の発見、これらはそれぞれ身体的な対人関係(自己と他者)の発見、言語的な対人関係の次元の発見と対応している。つまり表現を獲得するとは、二段階にわたって他者と関わりうるかどうか、それによって「見えないもの」の次元へ踏み込めるかどうかという問題である。自閉症の事例を検討することによって、表現の作動が表現以前の身体性の次元に基づけられていることが明らかになった。自閉症者は、いかにして身体的な対人関係の次元に参入するのか、そしてこの次元においていかにして運動感覚と情動性の浸透が成立するのか、という点で困難を抱えているがゆえに、言語使用にも困難を持つ。表現の形相的な起源は理念的構造そのものの中に求めなくては行けないが(そしてこの方向性においてはおそらく起源なるものは存在しない)、作動の局面における発生的な起源つまり初めの「出来事」はこの間身体的な運動感覚と情動性の相互図式化、つまりリズムなのである。

本研究は宮尾益知先生(国立成育医療センター発達心理科医長)のご指導とご協力を受けている。貴重な機会を与えていただいた先生に感謝を申し添える。また本研究は、文部科学省科学研究費補助金(若手 B)による研究成果の一部である。

- H. Bergson 1889, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Paris, PUF, 1927/2003
- G. Gerland 1997, *A Real Person*, Cura Bökforlag och Utbildning AB (ガーランド、『ずっと「普通」になりたかった。』、ニキ・リンコ訳、花風社、2000)
- T. Grandin 1986 (& M. M. Scariano), *Emergence Labeled Autistic*, Arena Press(グランディン、スカリアーノ、『我、自閉症に生まれて』、カニングハム久子訳、学習研究社、1994)
- T. Grandin 1995, *Thinking in Pictures*, New York, Bantam Dell Pub Group (グランディン、『自閉症の才能開発』、カニングハム久子訳、学習研究社、1997)
- E. Husserl (LU II/1), *Logische Untersuchungen*, II/1, Tübingen, M. Niemeyer, 1913 (1993) (『論理学研究』2, 立松、松井、赤松訳、みすず書房、1970、フッサール、『論理学研究』3, 立松弘孝、松井良和訳、みすず書房、1974、LUII/1 と略す(巻数とページ数はNiemeyer版に従う))
- E. Husserl (Ideen I), *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie I*, *Husserliana Band III*, Den Haag, M. Nijhoff, 1950, (フッサール、『イデー I』、渡辺二郎訳、みすず書房、1984)
- E. Husserl (Hua XXIII), *Phantasie, Bildbewußtsein, Erinnerung. Zur phänomenologie der anschaulichen Vergegenwärtigungen (1898~1925)*, *Husserliana Band XXIII*, Den Haag, M. Nijhoff, 1980
- R. Izumi 2003, 泉流星、『地球生まれの異星人、自閉症者として日本に生きる』、花風社、

- B. Kimura 1988, 木村敏、『あいだ』、弘文堂
- M. Merleau-Ponty 1942, *La structure du comportement*, Paris, PUF
- Y. Murakami 2006d, 村上靖彦、「視線の現象学 対人触発の求心的力動について」、『哲学』第 57 号
- Y. Murakami 2006e, 村上靖彦、「身体表面論 I:三重の動的均衡と感情 フッサールと自閉症を基点として」、『現象学年報』第 22 号
- R. Niki& H. Fujiie 2004, ニキ・リンコ、藤家寛子、『自閉っ子、こういう風にできてます』、花風社
- M. Richir 2000, *Phénoménologie en esquisses*, Grenoble, Millon, coll. Krisis
- D. Williams 1996b, *Autism An Inside-Out Approach*, London, JKP
- D. Williams 1998, *Autism and Sensing, The Lost Instinct*, London, JKP